

## オーストリア=ハンガリー帝国軍俘虜と日本

河 野 純 一

1914年6月28日、サラエボで皇位継承者フランツ・フェルディナント大公が暗殺され、7月28日、オーストリア=ハンガリー帝国は、セルビアに対して宣戦布告し戦争が始まった。その後、英独仏などが参戦し、大規模な第一次世界大戦となったが、オーストリアはドイツと同盟を結んでいたためドイツ軍と共に戦うことになる。一方、日本はイギリスと日英同盟を結んでいたため、8月23日、ドイツ帝国に宣戦を布告し連合国の一員として参戦した。そこで、日本とドイツ、そしてオーストリアは、中国大陸の青島をめぐる攻防戦で、初めて戦火を交えることになった。

皇位継承者暗殺の時、カイザリン・エリーザベト号 (SMS Kaiserin Elisabeth)<sup>1</sup> は山東半島東部の渤海湾に面した港、チーフー (芝罘Chefoo) にいた。軍艦旗は大公の逝去を悼み半旗で掲げられていた。そしてセルビアへの宣戦布告の一週間前の7月21日、カイザリン・エリーザベト号は、ウィーンからの指示で山東半島のチーフーの反対側の青島に向けて出港し、翌22日には青島に到着した。

エリーザベト号は約4000トンの巡洋艦であり、全長102.5メートル、主砲は24センチ砲二基だった。1914年の夏には、オーストリア海軍の軍艦

1 1892年1月24日に就役したカイゼリン・エリーザベト号にとっての最初の大きな航海は、フランツ・フェルディナント大公 (Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich-Este) を乗せ、東洋へ行くことだった。1892年12月15日トリエステを出発し、8月3日に長崎に着いた。フランツ・フェルディナント大公は20日間ほどをかけて、九州、関西から箱根、横浜、東京、日光などを訪れている。この1892年12月から翌年10月までの、日本を含む10か月に及ぶ世界旅行の記録を、大公は2巻からなる大部の „Tagebuch meiner Reise um die Erde“ として著している。

として、地中海の外にいる唯一の船だった。<sup>2</sup>

ドイツとともに戦うオーストリア=ハンガリー帝国のフランツ・ヨーゼフ皇帝は、カイザリン・エリーザベト号を青島防衛戦に参戦させるよう指示を出した。それはドイツ皇帝ヴィルヘルムが、カイザリン・エリーザベト号が青島とともに戦う姿勢を見せていなかったことにたいへん失望している、とウィーンに伝えられたことによるのだといわれる。当時のウィーンの新聞には „Der Abbruch der diplomatischen Beziehungen zu Japan.“ という表題で次のような記事がみられる。<sup>3</sup>

Der japanische Botschafter Satho hat erst am 8. August sein Beglaubigungsschreiben überreicht und muß nunmehr wieder Wien verlassen. Nachdem Japan von Deutschland in einem Ultimatum die Abtreibung von Kiautschou gefordert hat und schon in den nächsten Jahren ein Teil der japanischen Flotte vor der Bucht von Kiantschou erscheinen dürfe, um die dort befindliche deutsche Flottille (zwei mittlere Kreuzer, einige Kanonen- und Torpedoboote) zu vernichten, hat Kaiser Franz Joseph befohlen, daß unser in Tsingtau stationierter Kreuzer „Kaiserin Elisabeth“ an der Seite der deutschen Schiffe kämpfe. Die „Treue zu Tsingtau“ hat also veranlaßt, daß wir uns auch mit Japan im Kriegszustand befinden.

カイザリン・エリーザベト号は、半島の東側から攻めてくる日本軍に対する防御のため、艦に備え付けられた大砲をわざわざ外して、陸に運んで設置し砲撃を行ったのだった。

---

2 カイザリン・エリーザベト号は1913年3月19日アドリア海のプーラを出港し、スエズを経てアデン、コロombo、シンガポール、香港、チーフーに寄港し、11月4日に長崎に着いている。12月15日長崎を出港し上海、香港などに行った後、翌年3月9日、再び長崎を訪れ、別府、神戸などに寄った後、4月8日から5月1日まで横浜にいた。その後、四日市、鳥羽、鹿児島を経て上海に向かった。

3 „Neuigkeits-Welt-Blatt“ Nr. 195 (27.Aug.1914)

この青島をめぐる戦闘で、日本軍は世界の歴史上初めて艦載の飛行機による空襲を行った。母艦は若宮丸という名で、複葉の水上機を四機まで搭載可能だった。青島戦では49回出撃し190発の爆弾を投下した。湾内で最大の軍艦であったカイザリン・エリーザベト号も、史上初の実戦の標的にされた軍艦だった。<sup>4</sup>

オーストリア側のカイザリン・エリーザベト号の兵士、ケルンテン出身のヴァレンティン・ペルコーニク (Valentin Perkonig) は、日本軍の飛行機の空襲について次のように書いている。<sup>5</sup>

Fliegerabwehrgeschütze hatten wir nicht an Bord, wohl aber schossen wir mit den Gewehren nach den Fliegern, ohne zumal damit irgend etwas zu erreichen, zumal die feindlichen Flieger viel zu hoch flogen und wir in diesem Abwehrfeuer auch gar keine Übung hatten. Der ganze „Erfolg“ bestand darin, daß wir von unserem Maste bei diesen Salven die Antenne für die Funktelegraphie herunterschossen, worauf der Kommandant die unnütze Schießerei einstellen ließ. Auch später wurde die ELISABETH wiederholt von feindlichen Fliegern angegriffen und beschossen, ohne daß es dem Feinde jemals gelungen wäre, uns einen Treffer beizubringen.

また、カイザリン・エリーザベト号の艦長リヒャルト・マコヴィツ (Richard Makoviz) は、次のように記している。<sup>6</sup>

---

4 Wilhelm M. Donko: „Japan im Krieg gegen Österreich-Ungarn 1914-18“, S.89ff.

5 Valentin Perkonig: „Erlebnisse eines Kärntner Tsingtau-Kämpfers“, in: Erwin Sieche: „Rot-Weiß-Rot auf Gelbem Meer. Tsingtau 1914“, S. 47.

6 Wilhelm M. Donko: „Japan im Krieg gegen Österreich-Ungarn 1914-18“, S.100 u. S.21.; Richard Makoviz (1868-1945) はトリエステに生まれ、1887年19歳でオーストリア海軍に入っている。1909年にコルベット艦の艦長、その後カイザリン・エリーザベト号の艦長となった。名前は文献によって綴りが一定せず、Makoviz の他 Makowitz, Macovic, Markowicz とも書かれるが、マコヴィツ自身のサインが残されており、それから判断すると Makoviz と記するのが適当であると思われる。

S.M.S. war besonders als Ziel ausersehen; wiewohl viele Bomben auf uns abgeworfen wurden und zahlreiche in der Nähe einschlugen, wurde das Schiff niemals getroffen, auch Niemand verwundet.

一方、この戦闘については日本軍の記録もある。複葉戦闘機の母艦、若宮丸の大正3年の「戦時日誌」が、国立公文書館に残されている。

それによると、9月5日の飛行機偵察報告（若宮丸機密第八二號）<sup>7</sup>の箇条書の中に、

- 二、「カイゼリンエリザベス」及商船三隻ハ商港ノ埠頭ニ横着ス 砲艦三隻S90ハ工廠ノ埠頭ニ横着ス砲艦一隻ハ小港の棧橋ニ横着ス[…]
- 五、爆弾二個ヲ無線電信所ニ投シタルモ霧ノタメ結果不明
- 六、飛行機翼ニ小銃弾二個貫通シ翼ニ二三ヶ所ノ小破損ヲ生ス

とある。10月11日には「偵察中『エリザベツ』竝、陸上砲台ヨリ砲撃ヲウケシモ何等損害ナシ」と戦闘が続いていることが書かれている。<sup>8</sup>

11月1日の軍艦見島の「戦時日誌」<sup>9</sup>には

本日周防、石見、英艦ハ陸上を砲撃シ相當の損害ヲ與ヘリ又奥艦「エリザベス」ハ薄暮ニ乗シ我陸軍ノ右翼ヲ砲撃セシガ我海軍重砲隊の爲メニ撃退セラル

とあるが、しかしカイザリン・エリーザベト号は、この11月1日には砲弾も使い果たし、命令で自沈することになる。11月2日の深夜2時55分、すべてのハッチ、バルブを開け、爆薬に火をつけたのだった。

---

7 国立公文書館 JACAR Ref.C10080146600

8 国立公文書館 JACAR Ref.C14120039600

9 国立公文書館 JACAR Ref.C10080048500

この間のカイザリン・エリーザベト号の自沈状況については、若宮丸の「戦時日誌」には書かれていない。その理由は、11月1日、2日とも「天候不良ノ為メ飛行不施行」<sup>10</sup> だったからだ。若宮丸は沈没を無線によって知ることになる。11月3日付の日誌<sup>11</sup> には「無線電信ニ依レバ『カイザリンエリザベツ』湾内ニ爆沈セルモノノ如シ」とある。

その時のことをエリーザベト号の下士官キリル・カサピッコラ (Cyrill Casapiccola) が、次のような文章で残している。<sup>12</sup>

Nur wenige waren noch an Bord, die wie Gespenster herumschlichen und die Luntten zu den Torpedospitzen in den Munitionskammern legten. Alle Kessel standen außerdem noch unter Dampf, und die Zeiger der Manometer hatten die rote Marke schon überschritten. Die Luntten waren in Brand gesetzt und eiligst verließen die letzten sieben Mann mit dem Kommandanten das Schiff und fuhren mit der Dampfbarke vom Fallrep ab. [...] Während jeder in Schweigen versunken war und die Dampfbarke sich schon ziemlich weit vom Mutterschiff entfernt hatte, geschah das Schauerliche! Eine gewaltige Detonation, der einige leichtere folgten. [...]

少ししてから、マコヴィツ艦長は、船の沈んでいく所に近づこうとして、小艇の向きを変えた。さらに記述は次のように続いている。

Langsam näherte sich die Dampfbarke[...] hielt Distanz, um nicht vom Sog des Schiffes erfaßt zu werden.[...] S.M.S. Kaiserin Elisabeth gurgelte in die Tiefe, sprach damit den Abschied. Der Kommandant

---

10 国立公文書館 JACAR Ref.C10080034200

11 ibid.

12 Zitat nach Kaminski, Gerd/ Unterrieder, Else: „Von Österreichern und Chinesen“, S. 522.

entblößte sein Haupt und antwortete mit feuchten Augen: Addio Lisa, addio Lisa, addio Lisa!<sup>13</sup>

第一次世界大戦の青島の戦いで、日本軍は、ドイツ、オーストリアに勝利するが、その結果、多くの捕虜が日本に来ることになったのだった。日本は1911年に批准していた「ハーグ陸戦条約」によって捕虜たちを処遇することになる。

1914年11月14日、捕虜たちは船で青島から日本に向かって出発し、2日半をかけて17日に門司に着いた。九州の福岡、久留米、熊本、大分の収容所に送られる者たちは下船し、そこから瀬戸内海に入り、四国の松山、丸亀の収容所に送られる捕虜は高浜、多度津港で降り、本州の収容所に送られる捕虜たちは、18日広島で下船し、鉄道で姫路、大阪、名古屋、静岡、東京へと送られた。

巡洋艦カイザリン・エリーザベト号の乗組員だった兵士たちは、この時、広島から鉄道で姫路に送られた。姫路では寺が収容所として利用されることになっており、妙行寺、船場本徳寺、景福寺の三か所が使われた。景福寺にはカイザリン・エリーザベト号の乗組員を中心とした150名が収容された。収容所長野口猪雄次中佐の捕虜への訓示には、次のような言葉があった。<sup>14</sup>

「諸君は祖国の為め勇敢に戦ひたり、而かも刀折れ弾尽きて俘虜となりたり、吾人は諸君に対し多大の同情を表す」「軍人は軍人としての名誉を保たざるべからず、諸君はよろしく、独逸国軍人として、また奥国軍人としての名誉を保つべし」「諸君は我国の風土氣候に慣れざれば、各自衛生に注意し、身体を大切にせよ、而して平和克復の日を待て」

13 カイザリン・エリーザベト号は、海軍では親しみをこめて「リースル」(Liesl)とか「リサ」(Lisa)と呼ばれていた。ただ、皇妃エリーザベトの愛称である「シシー」(Sisi)で呼ばれることはなかったのだということだ。

14 『鷺城新聞』1914年11月22日付、大津留厚『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』36頁

12月になると、捕虜たちの姫路城への遠足も行われ、かなり捕虜たちの生活も落ち着いてきたのだということがわかる。

フランツ・フェルディナントの暗殺に端を発した戦争は、当初さほど長期化することは考えられていなかった。日本が参戦した青島の戦いは約三か月で終わったのだが、しかし翌年になっても戦争は収束に向かうことはなく、ヨーロッパでは飛行機の空中戦、空襲、戦車、潜水艦など、人類史上、未曾有の凄惨な近代戦が繰り広げられることになったのだ。

日本での捕虜収容も長期化することとなり、姫路から東北東約二十キロの青野ヶ原に俘虜収容所が1915年9月に造られた。

姫路の景福寺、そして青野原俘虜収容所に収容されていた砲兵長ドゥミトル・ニスター (Dumitru Nistor) が書いた日記が残されている。

彼はルーマニア北部のトランシルヴァニア地方のナサウドという村で1893年に生まれ、オーストリア＝ハンガリー海軍で軍事教育を受けた後、カイザリン・エリーザベト号に乗り込むことになったのだった。ニスターは自分の肖像やカイザリン・エリーザベト号を描き、また几帳面な文字のルーマニア語で日記を書いている。一部、ドイツ語に訳されたものがあるので、部分的に引用する。<sup>15</sup>

[...] da ich so viel Zeit habe, habe ich entschieden, sie nicht ungenutzt verstreichen zu lassen.[...] Deswegen habe ich mich immer bemüht, mich mit etwas zu beschäftigen: schreiben, lesen, zeichnen, malen, neue Sprachen lernen etc. Ich versuchte dann, die Last und den Schmerz, die mich quälten und mein Herz bedrückten, von mir zu nehmen: Aber mit wem? Und für wen? Da ich niemanden hatte, mit dem ich meinen Schmerz und meine Gedanken teilen konnte, hielt ich es für eine gute Idee, sie mit dem Papier zu teilen [...]

---

15 Vgl.: <http://www.europeana1914-1918.eu/en/contributions/6191>

ルーマニア出身の兵士がいたことは、当時のオーストリア=ハンガリー帝国が、まさしく多民族国家であったことを表している。日本に捕虜として連れてこられた兵士たちは、ドイツ、オーストリアだけでなく、例えばチェコ、クロアチア、ポーランド、北イタリア、ルーマニアなど様々な出身地だった。そのため戦争をめぐる国際情勢が大きく影を落とすことになる。

大戦が始まった翌1915年5月23日、イタリアは連合国に加盟しオーストリア=ハンガリーに宣戦を布告するといったことまで起こったのだ。それは、遠く、日本の俘虜収容所内の、兵士同士の関係にも影響を及ぼすことになり、争い事もしばしば起こるようになった。6月22日には、収容所内で大乱闘事件も起こっている。青野原俘虜収容所が出来る前の、景福寺の中の出来事だった。

捕虜の中には、ハプスブルク帝国の軍人として、現在のイタリア出身の兵士たちもいた。景福寺には、下士官2名、水兵6名、計8名のイタリア人捕虜がいたのだ。彼らが夕方六時半ころ、イタリアの歌を歌っているところに、140名のドイツ・オーストリア人捕虜が襲いかかり、袋叩きにしたのだった。

その理由は明らかだった。つまり5月23日にイタリアはオーストリア=ハンガリーに宣戦を布告したのだが、それは裏切りだと思ったドイツ・オーストリア人たちは、鬱憤を晴らそうと、イタリア人を襲ったのだ。

その時、九死に一生を得たイタリア人に、ブルーノ・ピンスキー (Bruno Pinski) という名の男がいた。彼は散々殴られて、厠に隠れたのだが、表を塞がれて戸を開けて出ることができず、厠の小窓からやっとのことで逃げ出した。その襲撃事件を経験したためか、彼は、あらためて民族意識に目覚め、ダイナマイト弾の設計図を、ドイツ、オーストリアに対して使用することを前提として、収容所長に託すという行動に出たのだった。その記録は1916年3月31日、青野原俘虜収容所「第二一〇號」文書として野口猪雄次所長から和田亀治陸軍省副官宛に出されたものに見られる。<sup>16</sup>

---

16 国立公文書館 JACAR Ref.C03024643800



當所收容俘虜中ノ伊太利種族ニ屬スル奥國海軍三等水兵ブルノー、ピンスキー ハ伊国軍ニ参加ノ希望ヲ有スルモ現下ノ境遇は到底之ヲ許サヽルニ依リ 自己ノ考察ニ係ル破壊用デナミット彈及飛行機用爆彈ノ断面圖ヲ呈出シ願ハクハ日本政府ニ於テ審査ノ上有効ト認メラレナハ聯合軍側ノ用ニ供スル如ク取扱ハレ度シト申出候 [...]

第一次世界大戦は、結局、短期間では終わらず、ようやく1918年11月に停戦、19年半ばになってから講和条約が調印される。

捕虜たちは5年以上も日本にすることになり、その間、収容所内で、チェス、トランプ、ビリヤードが許可されていたし、体操会、姫路師範学校とのサッカー試合、演劇、音楽会、展覧会などの催しも行われた。いくつか例をあげてみると次のようなものがある。

例えば、皇帝の誕生日に合わせて、音楽会が開かれることもあった。カールー一世の誕生日は8月17日だったので、1918年のその日には、もちろんハイドンの弦楽四重奏曲『皇帝』が演奏されたといわれている。さらにヨハン・シュトラウスの『酒・女・歌』やブラームスの『ハンガリー舞曲』も演奏されたようだ。また1919年3月30日には東シベリアで苦しむ兵隊仲間思いをはせて、コンサート（Wohltätigkeitskonzert der Lgerkapelle Aonogahara）が開かれている。<sup>17</sup>

- |                             |            |
|-----------------------------|------------|
| 1. Raymond Overtüre         | Thomas     |
| 2. Reverie                  | Vieuxtemps |
| 3. Solvejg's Lied           | Grieg      |
| 4. Norma Overtüre           | Bellini    |
| 5. Pilger-Chor (Tannhäuser) | Wagner     |
| 6. Militär-Marsch Nr.1      | Schubert   |

17 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』156頁

各地の収容所では、こうした音楽会や運動会、展覧会も開かれた。例えば青野原俘虜収容所では、1918年12月には、捕虜たちの作品展覧会が6日間にわたって開かれている。ピアノやヴァイオリン、チェロ、ツィターなどの楽器や、文具類、煙草入れなどの木工品、刳取り器械、模型、絵画、玩具類など数百点が、展示され、販売もされたということだ。絵葉書類には „So nun haben wir das halbe Duzend voll“ と、すでに6回目の新年を迎えることが書かれていたりするし、また „Nach der Heimat möchte ich wieder!“ といった、彼らの切々とした望郷の念が書かれている。

しかし、青野原の捕虜たちが日本の俘虜収容所から帰国の途に就くのは、ようやく1919年の年末になってからだった。

1914年に勃発した第一次世界大戦は、遠くアジアにまで戦火が及び、青島の攻防戦の末、青島は陥落し、ドイツやオーストリアの多くの兵士が日本軍の捕虜となった。日本各地の収容所に送られることとなったのだが、日本は、約4600人もの将兵の収容を想定していなかった。

日本への輸送自体が大変だったようだが、急遽、北海道を除く全国の15か所の俘虜収容所が用意された。当初は、姫路の景福寺のような場所を利用することもあったが、徐々に新たに収容所建設が行われていき、小規模な収容所は合併されていった。

ドイツやオーストリアの将兵は、各地に分かれて収容されたのだが、巡洋艦カイザリン・エリーザベト号の兵士たちの多くは、姫路の青野原収容所に入れられた。しかし、そこにはマコヴィツ艦長はいなかった。マコヴィツ艦長は、まず福岡の収容所に入れられていた。さらに青島総督アルフレート・マイヤー-ヴァルデック (Alfred Meyer-Waldeck) も、福岡に収容されその後、1918年3月にマイヤー-ヴァルデック総督とマコヴィツ艦長とも、習志野収容所に転籍している。

習志野は、明治の初めからと陸軍練兵場があったところだ。日露戦争後にはロシア兵の捕虜を収容するための廠舎が造られていたこともあって、新たに工事をしそこを利用することとした。工事は1915年6月に開始され、

開設は9月7日だった。それまでは、浅草本願寺を東京収容所として利用した。

1914年11月22日、捕虜たちは列車で品川駅に着いたが、その時の様子を新聞は「俘虜君 来る」との見出しを記し、次のような記事が書かれている。<sup>18</sup>

「品川停車場は空前の大混雑 七臺の電車で浅草本願寺へ 昨日午後三時五七分品川驛着、入京すべき青島俘虜軍は沿道の各驛にて萬歳を浴びせられつゝ定刻品川驛第三番線に入つた、日曜ではあり品川驛前は早朝から景氣付いて午前十時頃には大賑いで小學生徒の玩具の背囊を負い紙旗を樹てた少年軍もあつた」「停車場附近は人の山で驛前の旅館、飲食店は二階も店も一杯の人、遠くはハッ山橋の上まで密集してゐる。惻巧な見物は入場切符を買つて驛内にドンドン入り込むのでプラットホームは満々員、午後一時頃には驛前は 身動きもならぬ 程で」「驛員は品川驛開始以來の盛況だと云つてゐた」

品川駅前では、怪我人まで出たと、怪我をした人の名前が新聞に記されている。さらに本願寺に着いた時の様子も興味深い。

「午後四時頃すでに本願寺境内は俘虜見物の群衆あふるゝばかり立膝の餘地も無い 警官憲兵聲を嗷して制すれど雪崩を打つて惣門内に入らんとする群衆電車通りより 黒山の如く押寄せ 門の潜り扉は打破られ柵は忽ちにして押倒さるゝという凄じき有様」「午後六時門前に関の聲起りやがて俘虜將校の一团来る」「玄關鴨居に届くばかり六尺有餘の 偉大なる体格は 日本室に入り一層大きく見ゆる下士以下の俘虜君は四隊に分れて續々到着、品川停車場で貰つた菊花を各胸に差し頻りにその香を嗅いでゐる」「一同御食堂に入り了るや西郷中佐獨逸語を以て『自分は収容所長の西郷中佐である、勇敢なりし諸君を迎ふる

---

18 『東京日日新聞』大正3年11月23日付

を光榮とする 卿等が國の隊に在つたと同様 軍紀風紀を守られんことを希望する』と一場の訓示を述べそれより羽生中尉は俘虜の古参下士を助手として人名點呼をなす、マトローゼー（水兵）何々ハイツァー（機關兵）何々と呼べば撥刺たる元氣よき声にて『ヤアヤア』と應ふ」

収容所長の西郷中佐とあるが、西郷隆盛の嫡男西郷寅太郎<sup>19</sup>のことだ。ドイツのポツダム陸軍士官学校に留学していて、ドイツ語にもきわめて堪能であった。

習志野収容所には約1000名の将兵が収容されていた。バラック (Baracke) と呼ばれた宿泊施設が提供されたのだが、さらにラウベ (Laube) という小屋を彼らは造って、菜園を作ったり、ブタを育てたり、ビールの醸造までしていたのだった。

習志野の俘虜の生活について、讀売新聞は「俘虜生活」の表題で次のように報じている。<sup>20</sup>

「現在日本に収容してゐる敵國俘虜は四千六百二十八人で、習志野、静岡、名古屋、青野原（姫路の北方） 似の島（廣島の南方）板東（徳島市の北方）大分、久留米の八箇所に分割収容されてゐる」「習志野では彼等の食用の麵麴は皆彼等自身が製造する、そして自然最も念を入れるから頗る優良なるものが出来る 又石鹼製造の技師が居るので、石鹼を作らせて居るが、非常にいゝものなので 農商務省からはわざわざその研究に技師を派遣しすつかりその製造方法を會得した實例もある 豚の腸詰なども附近の住民に迄大歓迎を受け、石鹼も最近三千個騎兵聯隊から注文があつた 犢、羊、豚等の飼育も頗る好成績である」

---

19 西郷寅太郎 (1866-1919) は 1914 年 11 月 11 日に東京俘虜収容所長に就任し、1915 年 9 月 7 日の習志野俘虜収容所の開所にともない同所長となったが、「スペイン風邪」に罹患し病死した。

20 『讀売新聞』大正 7 年 6 月 13 日付

ここでも書かれているように、ソーセージ類も自ら作っていた。習志野にはカール・ヤーン (Karl Jahn) という、もともと肉屋の職人だったザールフェルト出身の水兵がいて、挽肉器や取手が両端にある刃が湾曲した包丁 (Wiegenmesser)、燻製窯を使って、本格的なソーセージを作っていたのだった。ソーセージの製法はカール・ヤーンによって農商務省技師の飯田吉英という人物に1918年2月から教えられたのだった。これは日本に本格的な腸詰が広まっていくきっかけにもなった。

その時、作られたと思われるのは、いわゆるウィンナソーセージはもちろんのこと、レバーペーストのようなレバーヴルスト (Leberwurst)、また豚肉のゼリー寄せのようなズルトヴルスト (Sulzwurst) といった本格的なものもある。さらにはブタの血を固めたソーセージ、ブルートヴルスト (Blutwurst) まで教えていたといわれている。現代でもドイツやオーストリアに行かないとなかなか食べられない本格的なものが、すでに大正時代に捕虜収容所内で作られていたのだった。

第一次世界大戦の青島の戦いの結果、捕虜になった、ドイツ人やオーストリア人が約4600人も、日本の収容所に入れられることになったのだが、それは、彼らの生活すべてが日本にやってくるということを意味した。つまり、収容所内の生活という限定的なものであるにもかかわらず、日本という異質の文化圏のなかで、食生活をはじめとする彼らの日常が展開されていくことになったのだ。

日本にはあまり馴染みのなかったソーセージを収容所内でわざわざ作っていたのは、そうしたことのひとつだった。さらに捕虜たちが、もともとドイツやオーストリアで手にしていたさまざまな職業的能力をも発揮していくことになる。

習志野収容所は、明治時代から軍の演習地だったこともあり、広々とした土地に恵まれていたので、サッカーなどをしていただけでなく、スポーツ祭 (Sportfest) や体操 (Turnen) をおこなっていたし、文化的な活動として、イブセンなどの芝居を上演したり、捕虜カレッジでの講義といった

こともされていた。

音楽についても、さまざまな機会に演奏会が開かれていた。クリスマスには決まって音楽会があったが、その他に、習志野収容所は、オーストリアの兵士よりドイツの兵士が多かったので、ルターを記念して1917年10月31日には「宗教改革400年記念音楽会」が開かれている。その曲目は次のようだった。<sup>21</sup>

Joh. Sebastian Bach: Praeludium für Harmonium

Martin Luther: Ein feste Burg ist unser Gott

Männerchor mit Streichorchster  
und Harmonium

Georg Friedr. Händel: Largo, für Violine Solo,  
Harmonium und Streichorchster

Joh. Sebastian Bach: a, Loure für Streichorchster  
mit Harmonium  
b, Sarabande, für Violine  
Solo, mit Harmonium

Josef Haydn: Serenade, für Streichorchster

Wolfgang Amadeus Mozart: „Ave verum corpus“  
Männerchor mit Streichorchster  
und Harmonium

Ludw. van Beethooven Die Himmel rühmen  
des Ewigen Ehre  
Männerchor mit Streichorchster  
und Harmonium

---

21 習志野市教育委員会『ドイツ兵士の見たニッポン』65頁。手書きをもとに印刷された、この音楽会のプログラムが残されており、Beethoven等に綴りの誤りも見られるが、そのまま引用した。

ハイドンやモーツァルトも演奏されたが、バッハやルターと、プロテスタントにちなんだ曲目がある。こうした「宗教改革」の記念音楽会が開かれたのも、捕虜に北ドイツ出身の兵士が多かったからだろう。

残されている音楽会のプログラムを見ると、例えば1919年3月9日にはベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲、また3月30日と4月1日の演奏会では、モーツァルトの『魔笛』序曲、『協奏交響曲』といった、かなり本格的な曲が演奏されていたことがわかる。<sup>22</sup>

こうした演奏会の「収容所楽団」(Lagerkapelle)として、「オーストリア分隊」(Österreichische Korporalschaft)と記されていることが多く、ドイツ兵が多数を占める習志野収容所でも、音楽面ではオーストリア兵が重要な役割を演じていたようだ。

また、ポピュラーな曲を集めた演奏会だと、よりオーストリア風の曲目が並ぶことがよくあった。例えば、1919年6月22日の「第7回収容所楽団演奏会」で演奏された曲を記してみる。<sup>23</sup>

1. Marsch: Im Zigeunerlager      Oscheit
2. Overtüre: Der Calif von Bagdad  
Boieldieu
3. a) Menuett      J.Haydn  
b) Volksliedchen      Komzak
4. Walzer: Zigeunerliebe      Lehár
5. Overtüre: Leichte Kavallerie      Suppé

---

22 習志野教育委員会『ドイツ兵士の見た NARASHINO 習志野捕虜収容所』63-64 頁。これらの演奏会でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲、モーツァルトの協奏交響曲のヴァイオリン独奏を担当したのは、ベルリン高等音楽院を卒業したハンス・ミリース (Hans Millies 1883-1957) で、彼はヨーゼフ・ヨアヒムにも師事していた。3月9日のベートーヴェンの協奏曲でもヨアヒムのカデンツァを演奏した。

23 習志野教育委員会『ドイツ兵士の見た NARASHINO 習志野捕虜収容所』65 頁

6. Liebliche kleine Dingerchen Gilbert

7. Walzer: An der schönen blauen Donau

Joh.Strauß

8. Marsch: Alte Kameraden Teike

オーシャイトとギルバート、そして行進曲『旧友』で有名なタイケはドイツの作曲家で、ボワエルデューはフランス人だが、それ以外はオーストリアで活躍した作曲家だ。コムツァークはボヘミア出身で、オーストリアで軍楽隊長を務めたウィーンらしい作曲家の一人だ。

このように、第一次世界大戦直後の大正8年に、すでに日本の捕虜収容所では、ハイドン、スッペ、レハールやヨハン・シュトラウスの『美しく青きドナウ』などの、オーストリアを代表する曲が演奏されていたのだが、それは一種の文化伝播に他ならなかった。

## Literatur:

Aichelburg, Wladimir: „Der Thronfolger und das Meer“. 2001

Bundesministerium für europäische und internationale Angelegenheiten und der Österreichischen Botschaft Tokio: „Österreichisch-Japanische Begegnungen. 140 Jahre freundschaftliche Beziehungen“. 2009

Donko, Wilhelm M.: „Österreichs Kriegsmarine in Fernost. 2013

Donko, Wilhelm M.: Japan im Krieg gegen Österreich-Ungarn 1914-18“. 2014

Franz Ferdinand, Erzherzog von Österreich: „Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892-1893“. 2 Bände. 1895-1896

Getreuer-Kargl, Ingrid / Linhart, Sepp: „Die Republik Österreich und Japan während der Zwischenkriegszeit 1918-1938 (1945)“. Beiträge zur Japanologie 42. 2013

Gogg, Karl: „Österreichs Kriegsmarine 1848-1918“. Salzburg 1972

Gottberg, Otto von: „Die Helden von Tsingtau“. Berlin-Wien 1915

Kaminski, Gerd / Unterrieder, Else: „Von Österreichern und Chinesen“. 1980

Mayer, Horst F. / Winkler, Dieter: „Rot-Weiss-Rote Weltreisen. Expeditionen der k.k. Marine“. 1998

Randa, Alexander: „Österreich in Übersee“. 1966

Schmalenbach, Paul: „Kurze Geschichte der k.u.k. Marine“. 1970



Sieche, Erwin: „Rot-Weiß-Rot auf Gelbem Meer. Tsingtau 1914“. Österreichs Militärgeschichte, Folge 4. 1996

大津留 厚:『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』2007

大津留 厚:『捕虜として姫路・青野原を生きる—1914－1919』2011

小野市史編纂専門委員会:『AONOGAHARA捕虜兵の世界』（『小野市史第三巻本編III』別冊）2004

瀬戸武彦:『青島から来た兵士たち』2006

高橋輝和:『丸亀ドイツ兵捕虜収容所物語』2014

習志野教育委員会:『ドイツ兵士の見たNARASHINO習志野捕虜収容所』2000

習志野市教育委員会:『ドイツ兵士の見たニッポン』2001

習志野市教育委員会:『習志野市史研究3』2003

日独交流史編集委員会:『日独交流150年の軌跡』2013

フランツ・フェルディナント（安藤 勉 訳）『オーストリア皇太子の日本日記』2005